

## 宏司チャン、さようなら

昭和19年卒 牧野 鐵五郎

碓井宏司君が亡くなった知らせを聞いて奥さんと電話で話しながら、涙がとめどもなく流れるのをどうしようもなかった。そうして、まるでワープロのフロッピーから写しだされる文章のように次から次へと、思い出が浮かびあがってきた。

私と、碓井君、イヤそんな他人行儀な呼び方はやめて、やっぱり“宏司チャン”と呼ぼう。その宏司チャンとの付き合いは、彼と私の家が西宮北口で近かったこともあり、また毎日学校へ通う電車のなかで私が話す飛行機の話に引きずりこまれ“鐵チャン”に出来て俺に出来ないことはないという彼独特の負けん気で航空部に入ってきた、というのが事の真相で、当時航空部では、エラク威勢のいい男が入ってきたと評判であった。

学年は同じだが航空部では私のほうが一年先輩なのに、単独飛行がすんだ頃には、私に操縦法を解説することもあったりして、同僚は一体どうなってるんだいと、半ば呆れる場面もしばしばあったが、それくらいお互い遠慮、気兼ねがなかった。昭和17年夏、名古屋本地ヶ原飛行場で待望の単独飛行を許され、嬉しそうにカメラに納まって笑っている彼の笑顔は誠に印象的である。

彼は同志社中学時代ラグビーをやっていたようで、そのせいか運動神経は抜群で、順調に二等操縦士の免状も取得して、学生助教となり後輩の指導にも当たっていた。戦いが終わり、航空再開を機に学連にも再建の動きが起こり、その第一回会合には彼も名前を連ねている。

最近の“宏司チャン”は四条畷市の老人クラブで、彫刻や切り絵を教えて皆から喜ばれ、彼はこれを生きがいに感じて活動していた。

喜びといえば、平成7年1月17日の大震災で私の家は全壊した。その避難先の家に彼は体調が悪



いのに、息子さんの自動車に山のような慰問品を積んでいち早く見舞いに駆けつけてくれた。その中身は、よくもまあこんなに、なにからなにまで気が付いたと思うくらい日用品を集めてくれていた。その一つ一つを取り出しながら彼の暖かい気持ちひしひしとせまってきて、思わず涙が頬を濡らしてきた。アリガトオ、心からそう思った。親友とは有り難いもの、心底そう思った。

その宏司チャンは、平成9年5月22日夜、間質性肺炎で天に召された(享年74歳)。色々話題の多い彼であったが、不思議と人に好かれた好漢碓井宏司君は再び我々の前にあの元気な顔を見せてくれることはない。

謹んで碓井宏司君のご冥福をお祈りいたします。

(平成9年5月22日逝去)

## 森茂君を悼む

牧野 鐵 五 郎

森君の訃報に驚かされた。そしてすぐに、あの同志社高商時代の森君の姿を思い出した。蛇腹のついた丸帽をきちんとかぶった森君は、私と違って真面目で、おとなしくて優等生の標本みたいな学生サンで黙々と飛行場に通って来ていた。学生より飛行機の方が大事な私とは違って、勉強は勉強、飛行機は飛行機と割り切っていた君の姿には、むしろ私は清々しさを感じていた。



月日は流れ、同志社航空部も50周年を迎えることになり、いろいろ式典のために、我々が企画を考えているとき、森君は、文字通り金は出すけど、口は出さない理想的なオーナー振りを見せてくれて、全面的に行事に協力してくれたのである。何時も温和な顔をして、皆が喜んではしゃいでいる姿を、ニコニコしながら見守っていてくれた、あの姿が臉に焼きついて離れない。会合に出席しても何時も控えめで、会の雰囲気を楽しんで居るように見受けられた。

あれから10年、わが部も新たに創部60年の節目を越えて、更なる発展を目ざしているときに親友、森君をうしなってしまった。まことに、残念の極みである。もっともっと長いきして、我々と一緒になって部の発展を見守って頂きたかった。本当に残念です。

森君、どうぞ、安らかにお眠り下さい。

森茂君のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(平成9年11月4日逝去)

## 住友博之君へ

昭和43年卒 北村悦造

前略、昨年末大阪で忘年会をやろうと誘った頃から、君の返事が返って来なくなって心配していましたが、そのまま断りもなく大空へ飛んで行ってしまったのは何故ですか？相変わらず君はマイペースな男だと思つづく思つてしまいました。54年の人生が短いのかそうでないのかは、君自身が判断することですけれど、君の日ごろの話しからしても、私にはまだまだ君が燃焼し尽くされたものとはとても思えないのです。

しかし、考えてみると人は誰でもこの世に一人で生まれてきて又一人で旅立つ時が来ることを思えば、まあ良いかと変に納得してしまいます。

人の出会いは偶然のいたずらでしかないけれども、その出会いはお互いに大切にしたいと君も常々言っていましたネ。君が航空部というクラブにどのような動機で入られたのか、私は知りませんが、とにかくそのクラブを通じて君と出会い、あの霧ヶ峰合宿から始まった合宿訓練での様々な出来事や、クラブを離れた男同志の付き合いで、君から得させてもらった事すべてを良い思い出としてこれからも続く43年同期会の集まりの時には必ず君をダシにしたいと思います。その時はすぐに例の調子で“アホぬかせ”の強い突っ込みを入れて下さい。

住友博之君、屈託のない人懐っこい君の笑顔がまた浮かんできました。もうこれ以上、今は君のことを思い出したくありません。

また会うときまで君の日ごろの夢が遠い大空のかなたでも叶いますように。

合掌

(平成10年4月26日逝去)

